様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０３５５

研究課題名（和文）ポール・ヴァレリーの初期詩篇の総合的研究

研究課題名（英文）Study of Paul Valery's poems written in his youth

研究代表者
松田　浩則（MATSUDA, Hironori）

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：００２１９４４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：『若きパルク』や『魅惑』といった中期以降に書かれた詩集とちがい、ポール・ヴァレリーの青年時の詩はあまり研究対象とはなっていないように思われる。このような研究状況の中で、フランスのファタ・モルガナ社が2009年に初めて公刊した彼の中学生時代に書いた詩をまとめた手帖を集約的に研究した。その結果、彼がヴィクトール・ユゴーやジェラール・ド・ネルヴァルの詩学に学びつつ、さまざまな詩型や韻律ならびに脚韻を試みていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The poems written in his young days by Paul Valery seem to be not studied seriously. In this circumstance, we studied <Cahier de Cette> published in 2009 by a French publisher Fata Morgana. This <Cahier de Cette> which contains 28 poems written when he was a junior high school student reveals that he learned especially the poetic of Victor Hugo and Gerard de Nerval.

研究分野：仏文学

キーワード：詩学　象徴主義

１．研究開始当初の背景

これまで、ポール・ヴァレリー（1871－1945）の作品、とりわけその詩作品に関しては、『若きパルク』（1917）や『魅惑』(1923)など、その中期以降の作品研究が主であった。もちろん、ヴァレリーが青年期にかなり長期にわたって対外的には沈黙を守り、ひたすらその日記『カイエ』の執筆に没頭していたことを考えると、こうした従来の研究のあり方があながち間違っていたと断ずることはできないだろう。しかし、彼の沈黙期以前、すなわち中学生時代ならびに高校生時代に、彼は数百編の詩を書いていたのであり、それらの詩、ならびにその詩的傾向をほとんど考慮にいれないような研究は、やはり研究としては不十分とのそしりを逃れないように思われる。

そのような研究状況の中、2009 年、フランスの Fata Morgana 社から、ヴァレリーが生地セットの中学生時代だったころに書きつけていた詩の手帖『Cahier de Cette』(『セット手帖』）が出版された。ここにはさまざまな詩型や韻律の詩 28 篇が収録されているが、これらはいわばヴァレリーの詩の原形であり、彼がどのような詩人の影響を受けてこれらの詩を書いたのか、その影響をどのように自分なりに消化していったのかを判断するには格好の研究対象であるように思われた。

２．研究の目的

本研究は、ヴァレリーの詩学、すなわち、詩にたいしてどのような姿勢で臨み、詩を作成していったのかという問題を、その青年期から晩年にまでいたる全作品を通して一貫して説明できるような視点を獲得することを目的としている。というのも、ヴァレリーは従来、その代表作と目されている『若きパルク』や『魅惑』といった詩集などから、ボードレールからランボー、ヴェルレーヌ、さらにはマラルメへとつながるフランス象徴派の詩人の一人、ならびにその継承者とみなされてきた。しかし、彼の作品のなかには、そうした評価や位置づけから大きくはみ出すと思われるような作品が少なからずあるのであり、そうした作品に照明をあてることは、あらたな相貌の下にヴァレリーを描くことになると思われたからである。

とりわけ、ヴァレリーの若い時に書かれた作品に関しては、これまで語句の解釈や表面上の詩型の研究にとどまり、1970 年以降は、これといって新しい研究は生まれてこなかったと思われる。こうした研究上の空隙を埋めるためには、『若きパルク』や『魅惑』にいたる詩の研究が不可欠であった。その空隙を埋めるひとつの手掛かりとして、これまでその存在は研究者に知られていたものの、ヴァレリーの遺族が長期にわたった保存していたためごく少数の研究者しか実際に見た者のなかった『セット手帖』の研究はきわめて重要なものと思われた。

３．研究の方法

ヴァレリーの作品の原稿（手稿）やそのマイクロフィルムの多くは、パリにあるフランス国立図書館に所蔵されているが、そのほかヨーロッパ各地の図書館にも少数ながら貴重な資料が保存されている。それで、2012 年から 3 年にわたり、フランス国立図書館とブリュッセルにあるアルベール１世王立図書館、それにコペンハーゲン大学付属図書館を訪れ、『セット手帖』ならびにヴァレリーの初期詩編関連の資料を収集した。まずは、『セット手帖』に収録されている 28 篇の詩すべてに関して、公刊されたものがヴァレリー自身の手稿ならびにマイクロフィルムと確実に一致しているのかどうかを確認する作業をおこなった。加筆や修正の多い資料体であったが、この作業はほぼ確実に進めることができた。

次に、これら 28 篇の詩がどのような詩型で書かれているのかを分析した。というのも、ヴァレリーはこれらの詩篇のほぼすべてを異なった韻律と詩型で書いているからである。彼はそれらすべての詩を定型詩で書いているにもかかわらず、その当時主流であったソネット形式（4 行＋4 行＋3 行＋3 行）をあえて用いず、きわめて独自な行数で詩節を構成するばかりか、ときに、一行を奇数の音綴にするなど、かなりアクロバット的な詩篇をも書いているのである。こうした詩型にたいする意図的な関与の在り方を研究するために、ヴァレリーの同時代の詩人ばかりではなく、過去の詩人でヴァレリーのモデルとなった詩人がいたのかどうかを探る必要が出てきた。

４．研究成果

まず、『セット手帖』というタイトルそのものについて、後年、ヴァレリーが書き始めることになる日記帖の『カイエ』(Cahiers)、そしてそれに先立って書かれた『ロンドン手帖』(Carnet de Londres、1894)を念頭に置いたうえでの命名であったであろうことを明らかにした。ここに一貫して流れているのは、ヴァレリーがこれらの書き物をなんらかの決定的な作品とみなしていたのではなく、たえず加筆と修正が可能な一時的なものとみなしていたということである。

次に作品の制作年代について考察し、成果を上げることができた。『セット手帖』の冒頭に置かれた詩篇「ウクライナのコサック」は 1884 年 1 月 26 日との日付があり、これが最初に書かれたと判断されるが、最後に書か

れた詩篇は 1896 年 8 月ごろと推定されるということ、つまり、この詩集に収められている詩篇は、ヴァレリーのおよそ 12 歳 3 カ月から 14 歳 10 カ月くらいまでに制作されたことが判明した。さらに、詩集の 10 番目に置かれた「嘆きと要求」の制作が 1884 年 6 月 20 日で、11 番目の「殺人…」の制作は 1886 年 4 月 12 日であることも判明した。つまり、これら 2 篇の詩の間には、ほぼ 1 年と 10 カ月の時間が流れているのであるが、この間、ヴァレリーが生地のセットを離れて、そこから 20 キロほど離れた大学都市モンペリエに引っ越していたこと、そしてその間、新たな詩作に励むべく、中世やビザンティンの芸術、さらにギリシャの研究などをしていたことを明らかにした。そしてさらに、この二つの時期を挟んで、ヴァレリーの詩の書き方や主題の選択に微妙な変化が表れていることも明らかにした。

この詩集の中で特筆すべき点のひとつが、ヴァレリーがさまざまな詩型を試みている点にあることは上述したが、それをより詳細に見ていくと、単にヴァレリーが多様な詩型を試みたというだけでなく、各詩篇の行数、詩節の数、1 行の音綴数、韻律や脚韻にたいしてもさまざまな工夫をこらしていることが明らかになった。たとえば、「ダンスホールの出口」は、7 詩節からなり、1 詩節は 6 行で、1 行は 4 音綴となっている。現代にいたるまで、1 行の音綴数を 4 で書きつづけた詩人は一人もいないはずであるし、実験の意味で詩作した詩人はいたにしても、それでも少数であることにはまちがいない。ここで中学生のヴァレリーの意図を推定すれば、それはフランス語という言語が詩の道具としてどのような素材を提供しうるのかを確認しようとしていたように思われる。その点は、「武器の音」でも確認できるように思われる。これは 70 行からなる詩であるが、3 音綴の詩句 2 行と 7 音綴の詩句 1 行がまとまりとなって展開して行き、最後の 5 行で 4、4、6、8、8 という偶数の音綴数になっている。戦闘場面の武器のぶつかりあう音が表現されている場面では 3 音綴と 7 音綴という奇数の音綴を使い、戦闘の激しさや勝敗がどちらに行くかわからない不安定感が表現された後、戦いに決着がつき、敗走が描かれる場面で重厚で安定感が増す偶数の音綴数を採用したと考えられる。きわめて意図的、かつ意識的に音綴数を変えることによって、詩の中に流れる音楽を自在に切り替える試みをしたものと考えられる。ここから聞こえてくるのは、まさに詩のタイトルが示しているように武器の音を疑似的に表現しようとする衝撃音や破裂音であるが、こうした音を通した音楽の可能性の追求にこそ、少年ヴァレリーの最大の関心事があったものと思われる。もちろん、こうしたアクロバット的な詩だけがこの詩集に収められているわけではないが、やはりこの詩の最大の特徴がそこにあったことは否めないだろう。

つまり、ヴァレリーのこうした詩作の態度を確認することによって、後年彼が頻繁に使う形式(forme)と意味内容(fond)との一体化という理想を、この時期すでにかなりの程度まで身に着けていたことが明らかになったのは大きな成果といえる。

最後に、このようなヴァレリーの詩作のモデルとなった詩人はだれだったのかを探った。青年期以降、ヴァレリーのモデルとなった詩人としてはアメリカのエドガー・アラン・ポーやマラルメなどの名がしばしば挙げられるが、中学生、高校生時代の彼のモデルはヴィクトール・ユゴーとジェラール・ネルヴァルであったように思われる。ユゴーに関しては、その『東方詩集』などによって古代文明や現代ギリシャへの興味を掻き立てられていたし、『ブグ＝ジャルガル』や『氷島のハン』や『ノートル＝ダム＝ド＝パリ』などの小説で騎士道的な小説の面白さやゴシック芸術のもたらす恍惚感を発見していた。『セット手帖』に収録された詩篇の中で一番長い「ロランの死」は、ユゴーの『諸世紀の伝説』に収録されている「ロランの結婚」の模作ともいうべきものであるし、また同様に『セット手帖』に収録された「V．ユゴー氏のいくつかの詩句のパロディー」の冒頭の一行「いいえ、バカロレアはだれのものでもありません」は、ユゴーの「ナポレオン II 世」の一句「いいえ、未来はだれのものでもありません」の明らかなパロディーである。こうした模作やパロディーを通して少年ヴァレリーは、1885 年 5 月に死去して大がかりな国葬の礼をもって送られたユゴーに最大の敬意を払っているのである。他方、ネルヴァルに関しては、その代表作と目される『火の娘たち』や『オーレリア、あるいは夢と人生』といった作品ではなく、彼が採取したヴァロワ地方のオドレットから、人々に忘れられかけていた詩型や韻律を学んだと思われる。ユゴーとネルヴァルというモデルを批判的に受容し、それと格闘することによってヴァレリーは自らの書く上での戦略を練り上げていったと判断される。

今回の研究の総まとめとして、『セット手帖』に収録されている詩篇をすべて日本語に翻訳した。もちろんこれは日本初の試みであるが、ヴァレリーの初期詩篇研究にとっておおいに資するものと思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１　件）

① <u>松田浩則</u>
ポール・ヴァレリー『セット手帖』、『紀要』第 42 号、神戸大学文学部、査読有、

2015、pp.67-112

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
松田　浩則（MATSUDA　Hironori）
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：00219445

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：